

令和三年十一月四日(木)

新型コロナ感染の感染状況も下火となった頃、  
新宿御苑にて吟行を行った。

中村 晃也

木漏れ日の中のカフエラテ菊花展

秋うらら水輪重なる夫婦鴨

句帳手に御苑を巡る菊日和

斉藤 まさお

秋の日や芝生の上の脱ぎし靴

和には和の洋には洋の庭の秋

秋光にせかされ葉っぱぼとり落つ

志村 良知

抜きん出て楓大樹の輝やきぬ

紅葉垂れたかいたかあい手の届き

天を摩す借景を得て菊花展

宮原 凧

風立ちて秋の木漏れ日揺らしをり

括られてなを凧と立つ菊花展

庭園に詩編のごとく木の実降る

首藤 しずを

寄る虫のためらふばかり菊大輪

団栗を踏み割る音の静かなり

影吐いて光きはまる黄菊かな

長尾 進一郎

舞ふ落葉両手で追へる子らの声

目の合ひし団栗ひとつ手に取れり

鈴懸の葉に葉の影や秋日差

森田 元斐

尖塔のビル借景に菊花展

名札背負ひ凧々しく咲けり大菊展

陽を浴びる並木静謐秋の色

高橋 由紀子

江戸菊の見頃それぞれ菊花展

残菊や郷土の垣根にありし色

紅葉揺れ透かし見ゆるやドコモタワ

新田 ゆふき

菊の黄や花弁の先まで輝かす

ミニよりはロングスカート菊花展

ヒマラヤの高嶺もかくや秋日和

安藤 晃二

小鳥来て榆の木陰の昼餉かな

沿道の石路の黄苑を案内す

群青や心打つ鉢菊花展

内藤 あした

青空や木々の間のからすうり

菊愛でつ妻の押したる車椅子

空の青残る紅葉際立てり

西川 知世

浮かみきて秋の陽喰らふ鯉の口

菊を守る若き庭師の寡黙かな

からつぽの蜘蛛の囿秋の陽を搦め

今回は令和三年十二月十五日(水)

兼題は中村晃也さん出題の「焚火」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

十二月の兼題「焚火」は、近年すっかり身ほとりで見かけなくなつたものの一つである。暖をとるため戸外で火を焚くことをいう。消防法や煙に有害物質が含まれる不安など、近年、とくに町住まいでは、戸外で物を燃やして暖を取ったり、子供たちと芋を焼いたりということを見かけない。ペン俳句諸氏は、経験として焚火の楽しみを知っている世代が多いから、各人の経験や記憶から引

き出して句に挑戦していただきたい。ただ、焚火を思い出としてそのまま季語として句が成立するかどうかはむづかしい。思い出はどの季節に思い出してもかまわないからである。冬の句として句の中に大気の寒さや目の前に焚火の温かさを読み込んで詠うことや、季語に預けて詠むことに挑戦したい。

焚火かなし消えむとすれば育てられ 高浜虚子

紙屑のピカソも燃ゆるわが焚火 山口青邨

とつぷりと後ろ暮れぬし焚火かな 松本たかし

焚火番ほとほとねむくなりにつけり 石橋辰之助

炎皆大地に沈む焚火かな 橋本鶏二

湖に焚火を捨てて去りにけり 上野 泰

焚火して戻るや遠く来しおもひ 上田五千石

軍港をあぶり出したる焚火かな 中村和弘

若ものとみれば飛びつく焚火の秀 能村登四郎

焚火中身を爆ぜ終るものあり 野沢節子

嫁ぐ子の焚火に投げしものや何 高本時子

落葉焚きゐてさざなみを感じをり 石原八束